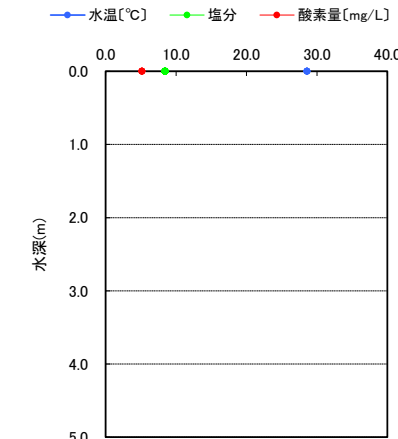
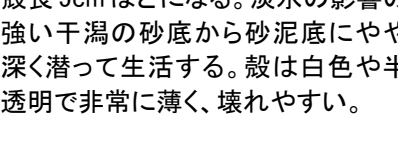
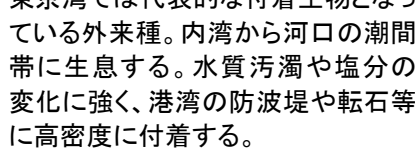
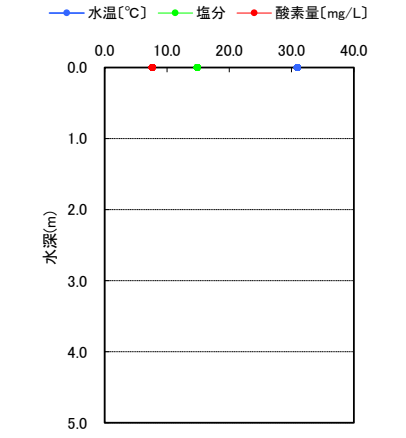
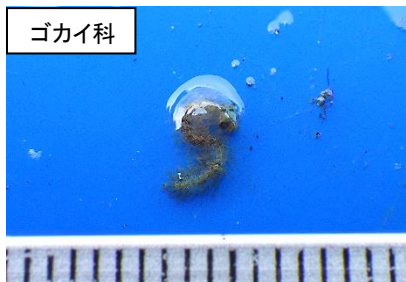


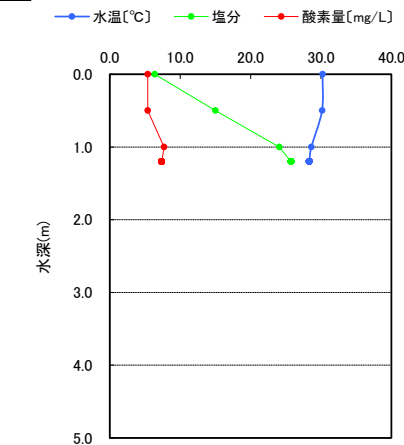
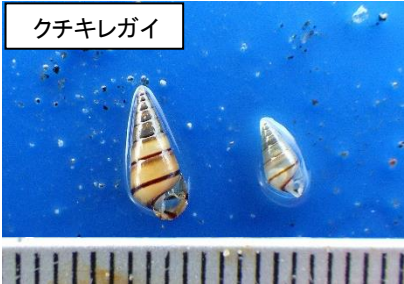
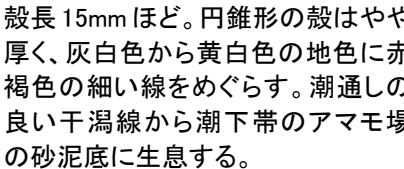
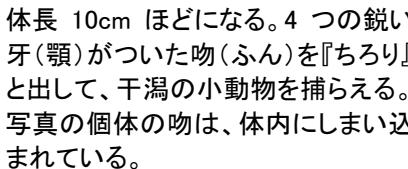
東京都内湾水生生物調査

地点名	多摩川河口干潟	調査年月日	令和 6 年 8 月 19 日	8:54~10:02
＜調査地点＞		＜底質状況、底生生物出現状況＞ ※写真のスケール 1 目盛:1mm		
				
				
				
底質はシルト混じりの砂であった。		体長 2cm ほどになる、フナムシに近い仲間。細長い円筒状の体をしており、白地に褐色の斑紋がある。干潟の表層部に巣穴を掘って生活する。		
				
殻長 5cm ほどになる。淡水の影響の強い干潟の砂底から砂泥底にやや深く潜って生活する。殻は白色や半透明で非常に薄く、壊れやすい。		東京湾では代表的な付着生物となっている外来種。内湾から河口の潮間帯に生息する。水質汚濁や塩分の変化に強く、港湾の防波堤や転石等に高密度に付着する。		
				
殻長 5mm もない小型の巻貝。巻貝含めタコ、イカ等の軟体動物には餌を食べるための器官「歯舌(しぜつ)」があるが、この仲間にはない。砂底や泥底に生息する。		殻長 4cm ほどになる。汽水域の砂底から泥底に生息するが、河口域にいるものは出水等の影響を受けやすい。		

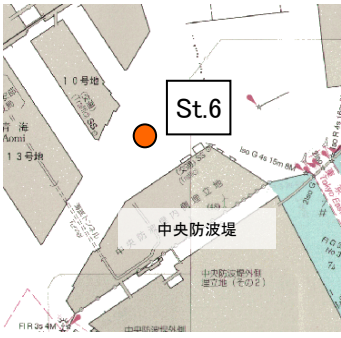
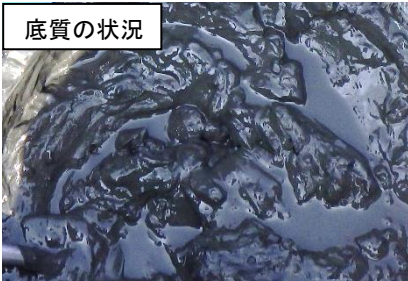
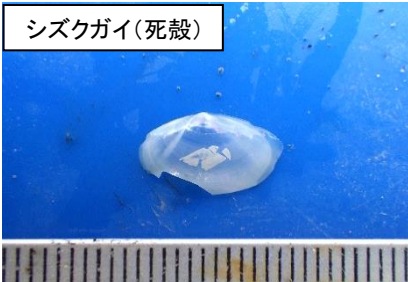
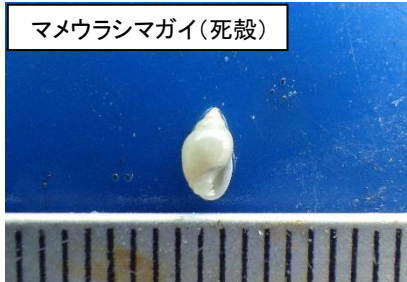
東京都内湾水生生物調査

地点名	森ヶ崎の鼻	調査年月日	令和6年8月19日	10:05~11:25
<調査地点>		<底質状況、底生生物出現状況>		
		 羽田空港の北側に残された干潟。干潮時でも周りは「海」に取り囲まれているため、岸から歩いて入ることはできない。		
		 ふるい上には大きめの貝殻片が残った。		
底質の状況  底質は砂混じりの粘土であった。		採泥状況  干潟に降り、小型の採泥器を用いて底泥を採取する。		
ヤマトシジミ  ※解説は多摩川河口干潟を参照。		紐形動物門  「ヒモムシ」と称される動物群。文字通り紐状で、とてもちぎれやすい。肉食性で、生きた多毛類等を体内に収納している吻(ふん)を伸ばして捕食する。		
ゴカイ科  生活様式も食性も多様な生物。ゴカイ科を含め、多毛類はたくさんの生物の餌となっている。肉眼での識別が難しいため、ゴカイ科とした。		ヨコエビ類  小型の甲殻類で、ヨコ「エビ」と言うがエビ(十脚目)の仲間ではない(ヨコエビは端脚目)。東京湾でよく見られるヨコエビ類は扁平な体のものが多く、転石上をその平べったい体を横にしてはい回るように動く。		

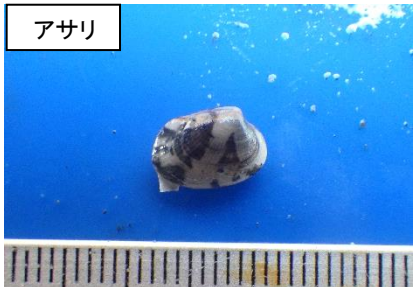
東京都内湾水生生物調査

地点名	三枚洲(荒川河口)	調査年月日	令和 6 年 8 月 19 日	12:11~12:52
＜調査地点＞		＜底質状況、底生生物出現状況＞ ※写真のスケール 1 目盛:1mm		
				
				
				
				
				

東京都内湾水生生物調査

地点名	St.6	調査年月日	令和 6 年 8 月 19 日	13:17~13:59
<調査地点>		<底質状況、底生生物出現状況>		
		※写真のスケール 1 目盛:1mm		
水温[°C] 塩分 酸素量[mg/L] 水深(m)		 東京港フェリーターミナルの正面で船上から採泥を行った。航路であるため、水深は 11.5m と深い。 赤潮が発生しており、6.0m 以深は貧酸素状態となり、水底付近は無酸素状態であった。(貧酸素状態:2.0mg/L 以下)。		
		 ふるい上には貝殻片が少量残った。		
底質の状況  底質はシルトであった。クリーム状でとても柔らかい。強い硫化水素臭(腐卵臭)があった。		ムラサキガイ(死殻)  港湾の防波堤等に高密度に付着する。夏季の高水温や貧酸素化にともなう大量へい死により、水質・底質の悪化を引き起こすことがある。		
シズクガイ(死殻)  半透明の薄く壊れやすい殻を持つ。貧酸素耐性があり、無酸素状態でも水温が 25°Cであれば 1 日は生存できる。有機汚濁の指標種の一つとされている。		チヨノハナガイ(死殻)  内湾の泥底に生息する。殻は非常に薄いため、もろく壊れやすい。貧酸素状態でも酸素がある期間に短期的に発生する。		
ヒメカノコアサリ(死殻)  殻長 8mm ほど。内湾の砂泥底に生息する。殻は薄く、強い放射肋(ほうしゃりく)が特徴。		マメウラシマガイ(死殻)  水深 5 m 以深の泥底に生息する小型の巻貝。厚く光沢のある殻を持つ。		

東京都内湾水生生物調査

地点名	St.31(多摩川河口)	調査年月日	令和 6 年 8 月 19 日	15:09～16:02
＜調査地点＞		＜底質状況、底生生物出現状況＞ ※写真のスケール 1 目盛:1mm		
		 多摩川河口から 1.5km 付近の浅場で調査を行った。水深が 1.4m と深く、船上から採泥した。		
水温[℃] 塩分 酸素量[mg/L] 水深(m)		 ふるい上には貝殻片が残った。		
底質の状況  底質はシルト混じりの砂であった。		水の臭気の確認  採取した水の臭気を確認する。今回、全地点で無臭であった。		
アサリ  ※解説は三枚洲を参照。				
マテガイ(死殻)  大きなものでは 10cm 以上になる縦長の二枚貝。砂底に縦穴を掘って潜っているが、急激な塩分の変化等の刺激を受けると飛び出すことが知られている。生活環境が良くないと移動する習性がある。		ミズヒキゴカイ  砂泥干潟や浅瀬の海底に潜り、水引に見立てられる細い糸のような鰓と触手を水中に伸ばしていることが多い。かなり汚れた環境でも生息している。		
		ケヤリムシ科 分泌物と泥で作った管を岩等に付着させ、その中に棲むゴカイの仲間。鰓冠(さいかん)を花のように広げ、呼吸をしたり、プランクトンを捕まえて食べたりする。カンザシゴカイ科によく似るが、棲管の材質で区別できる。		